

三重と愛知をつなぐ伊勢湾を行く

いつも「すばらしきみえ」をご愛読いただきまして、誠にありがとうございます。

私ども百五銀行は、おかげさまで平成30年11月19日に創立140周年を迎えさせていただきます。

これを記念しまして、今回は伊勢湾の対岸に位置する愛知県各地も合わせてご紹介します。歴史的・文化的見どころをご案内いただいたのは、各地域の観光ガイドの皆さんです。

現代では、陸路での往来が主流となっている三重県と愛知県ですが、近世以前は、海上交通が活発に行われていました。多くの人々や物資が伊勢湾内を行き交い、私たちが想像する以上に、深いつながりがあったことが分かるでしょう。

また、太古の昔より伊勢湾内外を回避し、現在でも各地の砂浜で上陸・産卵が確認されているアカウミガメと、調査・保護活動を行っているグループもご紹介します。

※伊勢湾の定義については、鳥羽市の答志島と愛知県田原市の伊良湖岬を結ぶ線の北側の海域、志摩市の大王崎と同じく伊良湖岬を結ぶ線の北側の海域などの説があります。そのため、広義では三河湾も含みますが、今回は定義にこだわらず、知多半島西岸地域を中心に紹介しています。

※各地域の観光ガイドおよび、各施設の予約方法・日時・受け入れ人数・料金などはそれぞれ異なりますので、事前に必ずご確認ください。



取材・文：中村真由美
撮影：梅川紀彦・中野耕司・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

桑名宿と熱田宿をつなぐ海上の道 「七里の渡し」



案内人は「熱田史跡ガイドの会」会長の周防（すおう）有彦さん。東海地方最大の前方後円墳「断夫山（だんぷさん）古墳」など、見どころが多い熱田の歴史に精通しています。

かつての「七里の渡し」に建つ常夜灯

江戸時代、伊勢湾の最奥部には海上の道が通っていました。東海道の桑名宿（桑名市）と熱田宿（名古屋市中熱田区）を結ぶ「七里の渡し」です。

東海道が整備され始めたのは、慶長6（1601）年のこと。前年に関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康が、幹線道路の整備に着手したのです。東海道には、順次、五十三の宿駅が整備され、大坂（現大阪・京都方面）から江戸方面へ向かう人々は、鈴鹿峠を越えて三重県内に入り、関宿（亀山市）、四日市宿（四日市市）などを経て桑名宿へと陸路を進みます。そして、海路で熱田宿へ向かったのです。

「七里の渡し」の名称は、その距離（約27.5キロメートル）に由来するといわれます。天候や潮の流れが順調であれば、4時間程度の船旅でした。多くの人々が海上を行き交う中には、俳聖・松尾芭蕉の姿もありました。

かつて、東海道随一の賑わいを見せたという熱田宿界隈を散策します。

熱田神宮の門前町

「最初に、熱田さんにお参りしていきましよう」と、周防さんが話す。熱田さんとは、熱田神宮のこと。伊勢神宮をお伊勢さんと呼び親しみを込めて呼ぶのと同様の想いが伝わります。クスノキやケヤキなどの巨木が林立する境内を進み、神明造りの本宮を間近に見ると、身も心も引き締まります。



熱田神宮の本宮

同神宮の歴史は、景行天皇43（113）年に、三種の神器の一つである草薙神剣（くさなぎのつるぎ）が祀られたことに始まるとされます。以来、人々の崇敬を集めています。熱田宿を一般に「宮宿」と呼ぶのは、熱田神宮の門前町として発展してきた歴史を物語っているのです。

松尾芭蕉が逗留した門人宅

静寂に包まれた熱田神宮の南門から外へ出ると、近くに立つ案内板が目にとまります。松尾芭蕉の友人で門人でもある林桐葉宅跡と記されています。貞享元（1684）年、「野ざらし紀行」の旅に出た芭蕉は、郷里の伊賀（現伊賀市）に立ち寄った後、吉野（現奈良県）な



林 桐葉宅跡に立つ案内板



伊勢国一の鳥居が建つ、桑名宿の「七里の渡し」跡（桑名市）

どを経て、桑名へ。ここからは船に揺られて「七里の渡し」を行きました。桐葉が、熱田に到着した芭蕉を手厚くもてなしたこと、芭蕉は感謝としばらく腰を落着けようとする気持ちを込めて「此海に草鞋すてん笠しぐれ」の句を詠んでいます。その後も桐葉宅を度々訪れ、句会を開いています。

美濃街道や佐屋街道の分岐点

「これを見ると、熱田が交通の要所だということが分かります」と、案内され



道標

たのが、住宅地の一角に立つ道標です。4面すべてに刻まれた文字は、読みにくくなっていますが、案内板を頼りに見ると、寛政2(1790)年に立てられたものだと分かります。周防さんには、ここが美濃街道や佐屋街道との分岐点であることを教わりました。前者は、大垣宿(岐阜県大垣市)を經由して中山道の垂井宿(同県不破郡)に向かう道。そして後者は、佐屋宿(愛知県愛西市)を經由して、木曽川を下って桑名宿へ渡るルート。海路を好まない人や、船旅に弱い人たちが陸路で桑名へ行けるように用意された東海道の脇往還(街道)です。

道標を後にして西に向かうと、やがて「大瀬子公園」に到着。すると、さまざまな魚が描かれたモニュメントに気が付きました。このあたり一帯は、かつての「熱田魚市場」。室町時代以降、伊勢湾周辺の豊富な海の幸を供給する市場として活況を呈していたのです。

尾張藩の海の玄関口「宮の渡し」

熱田宿の「七里の渡し」は、「宮の渡し」とも称されました。かつての渡し場には常時75隻の渡し船が置かれていたといわれています。

また、天保14(1843)年の調べでは旅籠の数が248軒と、街道一の多さ。ちなみに2番目は桑名宿の120軒でした。

現在、渡し場跡周辺は「宮の渡し公園」として整備され、園内には、常夜灯と鐘楼が並び建ちます。いずれも別の場所にあったものを再建したもので、常夜灯の方は寛永2(1625)年建立のもの、鐘楼は昭和30(1955)年に。



延宝4(1676)年に近くの蔵福寺境内に設置されたものが戦災で焼失したため、昭和58(1983)年に再建されました。また、近くには幕末期に旅籠を営んでいたという丹羽家住宅もあります。

お問い合わせ

熱田史跡ガイドの会
(熱田生涯学習センター)
TEL 052-671-7231

松坂(現松阪)と知多をつなぐ、 綿織物―知多木綿



岡田地区を案内してくれたのは、「岡田街並保存会ボランティア部会」部会長の竹内 哲夫さん。地区への深い愛情と誇りが伝わりました。

「手織りの里 木綿蔵ち」内での機織り風景

肥沃な平野が広がり、肥料となる小魚が豊富に獲れる三重県内の伊勢湾沿岸各地では、戦国時代末期から木綿栽培が始まりました。高い技術で加工された綿織物の中で江戸送りのものは、松坂木綿として売られ、伊勢商人の目玉商品となったのです。正徳2(1712)年に刊行された『和漢三才図会』では、全国の綿織物の優劣を比較して「勢州松坂を上とす」と、勢州(伊勢)の松坂木綿を高く評価しています。

一方、知多半島各地でも、江戸時代初期には綿織物生産が始まりましたが、晒加工技術がないため、生白木綿として現在の三重県へ運ばれました。同県内で加工して「松坂晒」「伊勢晒」として、白子港(鈴鹿市)から船で運んだのです。

知多木綿の名が知られるようになったのは、江戸時代後半以降。岡田村(現知多市岡田)の中島七右衛門が晒技術を伝えたことに始まります。風情ある岡田地区を歩けば、伝統を受け継ぐ人々との出会いがありました。



現在の白子漁港の様子(鈴鹿市)



「手織りの里 木綿蔵ちた」(国登録有形文化財) 外観

「手織りの里 木綿蔵ちた」

カラカラ、トントン、カラカラ：岡田街並み散策の拠点である「手織りの里 木綿蔵ちた」を訪ねると、機織りをする軽快な音が聞こえました。内部で作業をしているのは、「手織りの里 木綿蔵ちた」代表の関智子さんと会員の皆さんです。

江戸時代後半、中島七右衛門が晒加



「手織りの里 木綿蔵ちた」代表の関智子さん(手前向かって左側)と会員の皆さん

工技術を導入したことから、風合いのよい知多晒として知られるようになった知多木綿は、江戸庶民の肌着や手ぬぐいなどに多く利用されました。一方で、もともと農家の女性たちが農作業の合間に「農間稼ぎ」として始めたことから、各家では自家用に藍染めの綿木綿を織る「家織り」もしていました。各自が模様を工夫したことからは、綿を見れば誰が織ったかが分かる、といわれるほど



昔ながらの「ハタゴ」(機織り機)や手作り製品が並ぶ「手織りの里 木綿蔵ちた」

でした。関さんたちは、知多地域で織られている木綿生地を「手織り知多木綿」と総称し、その高い技術を受け継ぎ、魅力を発信するため、ここでバッグや壁掛けなどの木綿製品を制作・販売しています。また、機織り体験(要予約)も受け付けています。

「ここは、明治時代後期から大正時代初期にかけて建てられた、竹内 虎王商店の木綿蔵でした」と教えてくれるのは

竹内さん。お話通り、湿気を避けるために床が少し高くなっていたり、収納場所を広くするために柱を少なくするなどの工夫が施されています。

ところで、竹内虎王とは、どんな人物だったのでしょうか？ 木綿製造業を営みながら、動力織機の開発に没頭していたという虎王は、明治31(1898)年に「竹内式動力織機」を開発し、生産力向上に力を注ぎました。岡田が知多木綿の一大産地となった功労者の一人といえるでしょう。動力織機の導入により、地区内には多くの木綿工場が建てられました。この勢いは、昭和時代に入っても続き、織機を動かすガチャンという音が多くのお金を生むことから「ガチャマン景気」と呼ばれたといえます。

女工さんと故郷を結ぶ 「知多岡田簡易郵便局」

「手織りの里 木綿蔵ちた」の隣には「知多岡田簡易郵便局」があります。淡



「知多岡田簡易郵便局」(国登録有形文化財)

「竹之内 資郎邸」の長屋門

かつての繁栄の面影を伝える、なま

い緑色の洋風建築で、明治35(1902)年に「岡田郵便局」として新築されました。木綿工場で働く多くの女工さんが故郷に便りを出したり、仕送りなどで利用しました。

その後、一時期は家具屋などとして使用されていましたが、平成5年に再び現役の簡易郵便局として復活しました。



「竹之内 資郎邸」の長屋門

こ壁の蔵や黒板塀などを眺めながら歩いていると、見事な長屋門が目に残ります。「竹之内 資郎邸」の長屋門です。代々、庄屋や県議などを務めた竹之内家と知多木綿との関わりは、江戸時代中期に竹内(明治時代以降、竹之内に改姓)源助が、木綿買継問屋業の鑑札を受けたことに始まります。その後、困難を乗り越えながらも業績を伸ばしてきました。長屋門には門番や従業員の部屋が残されていると伺いました。



「旧竹中商店」の蔵

荷物の出し入れを容易にするために、蔵の地下に荷馬車が入るように工夫された「旧竹中商店」の蔵や、風格十分の「竹内虎王邸」など、見ごたえのある建造物などを過ぎると、「太郎坊」交差点の向かい側に階段が見えました。これを



「竹内 虎王邸」

上った先に現れるのが、慈雲寺の観音堂です。隣接して本堂が建っています。慈雲寺の歴史は古く、観応元（1350）年にまで遡ります。岡田は、同寺の門前町として始まったと教わります。
万治3（1660）年に再建され、同地区に現存する最古の建築物である観音堂に手を合わせて、後ろを振り返ると、階段の下に広がる空間が一望できました。その名も「お祭り広場」で、毎年4月



慈雲寺

中旬に行われる「岡田春祭り」では、3台の山車が集結します。

伊勢神宮ゆかりの岡田神明社

最後に、元和8（1622）年創建と伝わる岡田神明社に立ち寄ります。昭和32（1957）年に、伊勢神宮の遷宮古材が下賜されたことにより、社殿が造営されました。この時に行われた「お木曳」では、お揃いの法被を着た大勢の



岡田神明社

女工さんたちが、お木曳の車を運ぶなど、大層な賑わいだったと伺いました。

同神明社にお参りして、細い坂道を下りていくと、再び「手織りの里 木綿蔵ちた」に到着しました。小高い丘に挟まれた3つの谷に、優れた建築物が並ぶ岡田は、竹内さんの表現通り、知多半島の箱庭のような街でした。

お問い合わせ

岡田街並保存会事務局
（火・水・第4月曜定休）
（手織りの里 木綿蔵ちた）内
TEL 0562-5614722



「知多市歴史民俗博物館」外観



展示風景



「織りの技術伝承講座」が行われる「機織実習室」

「知多市歴史民俗博物館」

岡田を訪ねたら、同地区から車で15分ほど北に位置する「知多市歴史民俗博物館」に立ち寄るのもおすすめです。

館内では、知多半島の歴史をはじめとして、綿織物ができあがるまでの工程が分かりやすく展示・解説されています。綿の状態から機織りするまでの工程や器具などを見ていると、農家の女性たちが農作業の合間に、これほど複雑で繊細な作業をしていたことに驚

くことでしょうか。

同館では、知多半島の手織りの技術を後世に伝えるため、「織りの技術伝承講座」も開催されています。

さらに、知多半島の漁労用具などの展示も充実。中でも、唯一現存する打瀬船（打瀬網漁をする際の漁船）は、必見です。

お問い合わせ

「知多市歴史民俗博物館」
（月曜休館）
TEL 0562-3311571

伊勢湾から大海原へ漕ぎ出した、 尾州廻船・内海船



尾州廻船 内海船船主
「旧内田家住宅」では、
毎週日曜日の公開日に
「南知多観光ボランティア
ガイド」メンバーが内
部を案内してくれます。
今回、分かりやすく解
説してくれたのは、内田
卓男さん(右側)と石黒
嘉久さん(左側)です。

天井の見事な梁に圧倒される、旧内田家住宅の主屋

江戸が一大消費地に発展した江戸時代、大量物資を届ける貨物船が、太平洋上を定期的に行き交うようになりました。沿岸航路で荷物などを輸送する船のことを廻船と呼びますが、その中でも有名なものは、大坂と江戸を結ぶ菱垣廻船と樽廻船でしょう。

ところで、古来より伊勢湾内や熊野灘沿岸を船で往来していた知多半島各地でも、廻船集団を形成していました。たとえば、常滑(常滑市)を拠点とした常滑船、半島先端部に近い内海(知多郡南知多町)を中心とする浦々を拠点とした内海船などです。これらは尾張藩領にあることから、尾州廻船と呼ばれ、江戸時代後期から明治時代にかけて勢力を拡大し、菱垣廻船や樽廻船を脅かす存在となりました。現在、内海界限には、尾州廻船・内海船の代表的船主として名を馳せた内田佐七の住宅が現存しています。平成29年に国の重要文化財に指定された同住宅を訪ねると、三重県との深い関係がありま

内海船船主と藤堂家との交流

尾州廻船 内海船船主「旧内田家住宅」は、静かな住宅街の二画にありました。主屋内に入ると、まず目を奪われるのは、天井の太い梁です。

「良質な松の木が手に入つたので、それを使用したと考えられます」と教えてくれるのは、南知多町文化財保護委員で郷土研究誌みなみ編集者でもある内田卓男さん。傍らで石黒嘉久さんが領きます。お二人の案内で広々とした和室が続く居室へと進みます。その造りは、豪農の住居のようですが、仏間に続く神



尾州廻船 内海船船主「旧内田家住宅」外観



神屋



斎藤 拙堂の扁額
(室内などに掛ける横に長い額)



津藩主・藤堂家から寄贈された
沓脱ぎ石(向かって右側手前)

内田 佐七、躍進の軌跡

主屋・座敷に加えて隠居屋なども揃い、想像以上の広さの同住宅を明治時代初期に建てたのは、2代目内田佐七です。その後、3代目の逝去後に海運業から撤退しました。

同家が廻船船主への道を歩み始めたのは、文政元(1818)年のこと。初代佐七が、当時、尾張地域で最大の廻船船主だった前野小平治家から商売の元手金を借りたことに始まります。この時、借金(おかし)の抵当としたのは、中古の不知波船や宅地などでした。不知波船とは、

小型の運送船のことで、主に水産物や薪炭などを運搬しました。続いて初代佐七は、翌年に280石の中古の廻船を購入します。なお、尾州廻船は200石以上の船のことをいいますが、この数字は積込む米の重さを指します。1石は150キログラムであることから、たとえば千石船の場合、150トン分の米を積込める大きさだということになります。こうして大海原に繰り出した初代佐七は、文政3（1820）年には戎講に加入し、正式に内海船の仲間となりました。戎講とは、地域の船主や船頭たちで結成する組合のこと。組合内の統制や取引・荷役に関するなどを相談していました。他地域の尾州廻船でも独自の講を結成し、この結束の固さが強みでした。

さらに、内海船の最大の特徴は、生産地で買った荷物を、輸送した先で売却する「買積」方式を行ったこと。たとえば、瀬戸内や上方では米や塩など、伊勢湾岸各地では米など、江戸周辺で

は肥料や大豆・小麦などを買取り、需要のある場所に販売したのです。この方式は、他人の荷物を運んで運賃を得る「運賃積」とは違い、市場相場を見ながら積荷の種類や運航先を変更でき、売買の差額によって大きな利益を得ることができました。その反面、相場の読み間違えや、海難事故などの高いリスクを抱えることにもなります。しかし佐七は、自らの商才と戎講仲間の情報力で乗り越え、全盛期には10艘近くの廻船を所有していたのです。

大湊で建造された廻船

「内田家が所有していた船などは残っていませんが、隣の『内田 佐平二家』で千石船の模型を展示しています」と案内されたのは、佐七家の娘婿となった人



800石積みの廻船「宝久丸」の板図(板に描かれた設計図)を基に製作された模型(※700~800石積みの船も、一般には千石船と称された)

泉蔵院と慈光寺

旧内田家住宅に別れを告げて、すぐ近くに位置する泉蔵院と慈光寺を訪ねます。いずれも内田家をはじめとする戎講仲間ゆかりの古刹で、木々が生い茂る中に本堂などがたたずんでいます。



慈光寺



泉蔵院

夏には多くの海水浴客で賑わう「内海海水浴場」もすぐ近く。砂浜が続く遠浅の海を眺めながら、かつて、沖合に何艘もの千石船が浮かんでいた様子を想像



「内海海水浴場」



「つぶて浦」



南知多観光ボランティアガイド事務局
(南知多町観光案内所内)
TEL 0569-62-3100

お問い合わせ

いたるところに三重県との密接な関係がある内海界隈の散策は、発見の連続でした。

像していると、波打ち際に立つ小さな鳥居に気がきました。ここは「つぶて浦」で、その昔、神様たちが伊勢から石をどれだけ遠くへ投げられるかを競った際に、その石が落ちた場所だと教えてもらいました。

物を初代とする分家の「内田 佐平二家」。お話の模型は、10分の1の大きさですが、細部まで忠実に再現されていて、迫力十分。1本の柱に張られた木綿帆が、風を受けて颯爽と海上を進む様子が想像できました。

ところで、全盛期の内海船は1000

艘以上あったといいますが、これらの船は、どこで建造されていたのでしょうか。実は、ここにも三重県との関係があり、ほとんどの船を大湊(伊勢市)で造っていたのです。

伊勢湾と江戸を結ぶ 尾州廻船・常滑船と常滑焼の里



常滑の町を案内してくれたのは、「常滑やきもの散歩道観光ガイド」の稲葉春彦さん。細部に至るまで丁寧に案内する姿に、地域への深い愛情を感じました。

道の左側を土管、右側に焼酎瓶が埋め込まれた「土管坂」

平成29年、「日本六古窯」が日本遺産に認定されました。「日本六古窯」とは、古来の陶磁器窯のうち、中世から現在まで生産が続く代表的な6つの産地の総称で、越前焼（福井県越前町）・瀬戸焼（愛知県瀬戸市）・常滑焼（同常滑市）・信楽焼（滋賀県甲賀市）・丹波焼（兵庫県篠山市）・備前焼（岡山県備前市）が含まれます。

この中で常滑焼といえば、朱泥急須をはじめとして、大きな土管や甕などが浮かびますが、これらの陶器を全国に広める役割を果たしたのが、尾州廻船・常滑船でした。

現在、常滑の町並みを歩けば、江戸時代から明治時代まで、常滑船の廻船問屋として栄えた瀧田家の屋敷が公開されているほか、明治時代の登窯（国指定重要有形民俗文化財）などを見学できます。

また、かつての海岸沿いに建つ正住院には、徳川家康にまつわる逸話も語り継がれています。

伝統と歴史ある常滑は、常に変化し続けている町でした。

常滑船の歴史を物語る 「廻船問屋瀧田家」

常滑市内散策には、各観光スポットに案内板が設置されている「常滑やきもの散歩道」を巡るとよいでしょう。コースは「陶磁器会館」を基点とするA・B・2通りあり、前者では「廻船問屋瀧田家」をはじめとして、国指定重要有形民俗文化財の登窯などを約1時間で散策できます。後者の場合は、約2時間30分かけて「こなめ陶の森資料館」や「INAXライプミュージアム」などを巡ります。

Aコースを選択した今回、最初に訪

ねたのは「廻船問屋瀧田家」です。瀧田家は、18世紀初頭から続く旧家で、同屋敷は、4代目金左衛門が廻船業を始めてまもなく、嘉永3（1850）年ごろに建てられたもの。尾州廻船・常滑船の歴史を偲べる場所として常滑市が復元整備し、平成12年から一般公開されています。

積周丸・宝周丸・栄周丸・福周丸と、所有していた廻船の名前を記した幟や、幕末から明治時代中期ごろまで使用されていた無尽灯（菜種油を用いる灯火具）などが見られる主屋に加えて、離れや土蔵なども揃い、かつての繁栄が感



「廻船問屋瀧田家」外観



無尽灯

幟



離れ



木札

じられる中、土蔵の中で青峯山正福寺と記された木札を見つけました。鳥羽市にある同寺は、古くから海上安全の祈願所として信仰を集める名刹で、今も全国から船舶関係者が参詣に訪れます。幕末から明治初年にかけて3回の海難事故に遭遇した瀧田家でも、航海の安全を祈る日々を過ごしていたので



青峯山正福寺（鳥羽市）

その後、明治5(1872)年には木綿問屋も開業した同家ですが、同18(1885)年に廻船経営から撤退しました。

常滑焼や〆ひろに〆を運ぶ

「二口に尾州廻船といっても、拠点とする地域によって、運ぶ荷物などに特徴があり、内海米船、野間塩船よ、なべやひろ荷でとどめさす」と歌われました」と、稲葉さんからおもしろい俗話を教わります。内海とは前述の内海船のことで、主に米を、野間とは現在の美浜町を拠点とする野間船で、主に塩を運んだことがわかります。そして、なべとは常滑のことで、現在でも年配者の間では〆とこなべと呼ぶ習慣があると聞きました。続く〆ひろに〆とは拾い荷という意味で、種々雑多な荷物を扱うことを表しています。主に伊勢湾と江戸方面の間を航海していた常滑船は、伊勢沿岸各地の特産品の茶・酒・水油(みずあぶら)・木綿に加えて、美濃(現岐阜県)の特産品である干大根や傘なども扱っていた。



煙突のある風景

ました。これらは川の道を利用して桑名などに運ばれ、そこから江戸へと運んだのです。

「やきもの散歩道」を歩く

瀧田家を後にして、「やきもの散歩道」を進みます。家並みの中に立ち並ぶ煙突や、道の両側に土管や焼酎瓶が埋め込まれた「土管坂」など、独特の景観が続きます。また、明治20(1887)年ごろに築かれた登窯「陶栄窯」も見学できます。明治時代末ごろには、常滑にはこうした登窯が60基ほどあったといわれます。



登窯「陶栄窯」内部の様子

中世から現代に至るまで、その時代に応じて製品の大きさや形を変化させながら、陶器の町として栄えてきた常滑ですが、江戸時代に主に作っていたのは、大型の壺や甕などでした。中には死者を葬る棺として利用された甕もありました。それだけ大きな製品を作ることができたのは、陶土の粘りが強くて成型しやすいこと、全体を焼締めるために比較的低い温度でも焼きあがる特性があったことなどが挙げられます。また、港が近いために大きなものでも比較的容易に運ぶことが可能でした。

こうした大型陶器を江戸へと運んだのが尾州廻船・常滑船です。また、常滑焼などを運んだ帰りに、伊勢や三河から焼き物の燃料となる薪や松葉を仕入れることで、発展に寄与したのです。

徳川 家康伝承の正住院

「常滑の海岸線は、以前は正住院のすぐ近くまで迫っていた、波打ち際には石垣が続いていました」。

「やきもの散歩道」から少し足を延ば



正住院の石垣



徳川 家康公腰掛の石

して、知多バス「保示」バス停近くの正住院に向かうと、城跡が見られるような見事な石垣が現れました。残念ながら今では、かつては潮干狩りができたという当時の様子を想像するのは難しい状況ですが、実は同院には、徳川家康にまつわる興味深い伝承があると伺いました。伝承とは、天正10(1582)年、家康が本能寺の変から逃れる際、堺(現大阪府堺市)から伊賀越えで三河に帰ったといわれる話に関するもの。

この時、伊勢湾上を船で三河へ向かったといわれますが、その途中、同院裏手の海岸にたどり着いたということです。この時の経路については諸説あり、真偽は分かりませんが、境内の片隅には、家康が腰掛けて休憩したという石がたたずんでいました。

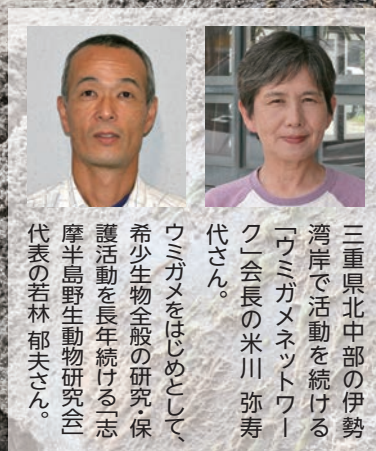
ここにも三重県とつながる、歴史ロマンがありました。

お問い合わせ

公益社団法人常滑市シルバー人材センター
(常滑やきもの散歩道観光ガイド)
TEL 0569-189-7722



伊勢湾を行く 希少生物・アカウミガメ



三重県北中部の伊勢湾岸で活動が続ける「ウミガメネットワーク」会長の米川 弥寿代さん。
ウミガメをはじめとして希少生物全般の研究・保護活動を長年続ける「志摩半島野生動物研究会」代表の若林 郁夫さん。

「ウミガメネットワーク」

「今日時点で、津市内の7か所で産卵が確認されています」。夏のある日、米川さんの案内で阿漕浦の浜辺を歩くと、70〜80センチメートル四方を網で囲んだ一角が見えてきました。すぐ脇には「ここにウミガメが産卵しました。子ガメが無事に海へ帰れるように見守ってください」と、米川さんたちが立てた看板があります。

アカウミガメが産卵に訪れる場所は、こうした砂浜が続く海岸ですが、米川さんによると、かなり奥行きが必要で、台風や高波が来ても波をかぶらず、海浜植物が生えているような場所が広がっていないと十分ではないとのこと。そのため、一旦上陸しても産卵せずに海に戻ってしまう場合もあるといいます。1度に産卵する数は100個ほどですが、無事に産卵を終えても、全国平均の孵化率は50〜60%程度。さらに、黒潮に乗って太平洋の対岸のアメリカ



産卵場所を保護するための網



伊勢湾をめざす子ガメ※



海岸清掃活動※

西海岸などへ渡り、成体になるまで生き残れるのは、わずか5000分の1程度なのです。

米川さんが、ウミガメに関心を持ったのは平成17年のこと。孵化したばかりの子ガメが砂から脱出し、砂浜をクロールで泳ぐように前進しながら海へと帰っていく姿を見たことがきっかけだと伺いました。以来、ウミガメを追い求める日々が続きましたが、調査や保護のためには、地域と連携したネットワークが必要だと気付き、平成26年に結成したのが「ウミガメネットワーク」です。

現在、その活動範囲は、北は四日市市から南は津市までの約40キロメートルにわたります。また、三重大学のウミガメ・スナメリ調査・保全サークル「かめつぶり」をはじめとして、各地域で保護活動を行うグループと協力しながら、啓発調査・見守り・獣害対策などのさまざまな活動を行っています。

アカウミガメが産卵していると連絡を受ければ、早朝であっても駆け付けて、調査のための撮影などを行うという米川さん。また、孵化した子ガメが街灯な

アカウミガメの産卵の様子 ※

5月から8月にかけての夜、伊勢湾沿岸の砂浜では、アカウミガメの産卵が行われます。子ガメは2か月ほどで孵化すると、砂をかき分けて脱出し、海をめざします。20年から30年かけて成長したアカウミガメが、再び上陸・産卵するというサイクルが、私たち人間が伊勢湾沿岸で暮らすようになる、はるか昔から綿と続けられてきました。かつては頻繁に見られたというアカウミガメですが、『三重県レッドデータブック2015』によると、「本県沿岸域では、漁業による混獲で多数が死亡しており、減少している。また、卵が高波などによって流出することが多いことから、絶滅危惧Ⅱ類に分類されています」。

現在、伊勢湾沿岸地域では、アカウミガメをはじめとした希少生物たちの保護活動を行うグループが数多く存在します。愛知県側にも存在しますが、今回は、主に三重県で活動する「ウミガメネットワーク」と「志摩半島野生動物研究会」をご紹介します。



「ウミガメロード」設置作業※



「ウミガメ出前講座」※



アカウミガメの孵化率の観察会※

どに惑わされて迷ってしまうことがないように、産卵場所から波打ち際までの間を波板で囲んだ通路「ウミガメロード」を作ったりするなど、そのアイデアと行動力には驚くばかりです。さらに、小学生などを対象にした「ウミガメ出前講座」では、紙芝居やDVDなどを駆使して、上陸したウミガメを見つけても触ったり近づいたり、ライトを当てたりしないことや、砂から脱出した子ガメにライトを当てたり、フラッシュをたいて撮影しないことなど、気を付けなくてはいけない理由もあわせて解説

「志摩半島野生動物研究会」

三重県内で、いち早くアカウミガメの調査・保護活動を始め、「ウミガメネットワーク」をはじめとした各グループの先駆者的役割を果たしているのが、「志摩半島野生動物研究会」の若林 郁夫さんです。若林さんが同研究会を結成したのは昭和63(1988)年、鳥羽市の「鳥羽水族館」に入社して2年目のことでした。当時はまだ、伊勢湾沿岸などに上陸しているアカウミガメの調査が

第62号では、志摩半島全域で産卵情報を収集し始めた平成10年からの産卵巣数の推移を棒グラフで表しています。グラフを見れば、3〜4年周期で増加と減少を繰り返す傾向であることが分かるなど、現状の把握に加えて、今後の予測にも役立ちます。こうしたデータの蓄積は、今後の保護活動を考える上でも、貴重な資料となっているのです。

また、同研究会の調査対象は、アカウミガメ以外の希少生物にも向けられた例えば、鳥類ではシロチドリやコクガン、魚類ではトビハゼ、甲殻類のスナガニ、昆虫類のカワラハンミョウなど、

その範囲が広がっています。さらに、哺乳類ではスナメリも調査対象と聞き、伊勢湾にイルカの仲間が生息していることに驚きました。

クジラ目ネズミイルカ科のスナメリは、体長は170〜200センチメートルで、体重は60〜70キログラムほど。伊勢湾・三河湾には、約3500頭が生息しているといわれます。最近では「鳥羽水族館」のすぐ前の海で目撃することがあり、観察を続けていると伺いました。同研究会結成以来、休日を利用して各地で調査を行っている若林さんは、これらの希少生物の保護のためには、ま

ず現状を正確に知ることが大切だと話します。それは、アカウミガメ保護活動に奔走する米川さんにも共通する想いです。「ウミガメネットワーク」と「志摩半島野生動物研究会」の地道で息の長い活動は、これからも続いていくことでしょう。

お問い合わせ

「ウミガメネットワーク」

TEL 090-5600-0221

(米川さん)

「志摩半島野生動物研究会」

TEL 090-8957-9288

(若林さん)



「三重の生きものだより」



シロチドリのヒナ※



スナガニ※



「鳥羽水族館」で飼育されているスナメリ